



## シエイクスピアへの新しい扉を開く！

世界中のどんな演劇作品も、すべてシエイクスピア作品に帰結すると言われるほどの天才劇作家シエイクスピア。

彼は1564年に生まれ、1592年に劇作家として認められます。その後21年間に37作品を書き、詩人としても名声を得ました。心をつかむストーリーと、名言の散りばめられたせりふが魅力の作品は、喜劇・悲劇・歴史劇・ロマンス劇などのジャンルに分けられます。4大悲劇(『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』)は特に有名です。とりわけ『マクベス』は全作品の中で3番目にストーリーが短く、人間の心の闇や葛藤を速いテンポで掘り下げ、せりふの完成度は高く評価されています。シエイクスピア劇は「せりふが多くて難解だ」と思う人にも、心配り無しで『マクベス』は分かりやすくドラマチックでスピーディー

な展開なのです。400年以上前に書かれた傑作。今もなお、演劇や映像などで上演され続けています。

今回は、V・ペリヤコーウィッチ(2016年没)の大胆で斬新な演出によって、さらに衝撃的で、躍動感あふれる舞台となっています。彼の最後の作品となりました。この例会が、シエイクスピアへの新しい扉を開いてくれるかもしれません。(國富 美由紀)

### ◆「マクベス」豆知識◆

1957年黒沢明監督による「蜘蛛巣城」は「マクベス」を題材にし、日本の戦国時代に置き換え、三船敏郎主演で映画化された。岡山市民劇場では、1979年俳優座(マクベス：加藤剛)、1982年仲代ブロジエクト(マクベス：仲代達矢)で例会に迎えている。

★とにかく舞台上で、動く、動く、「動」と「静」でいうと、こんなに「動」の舞台は初めてだったので驚きました。役者は大変だったと思います。最後まで緊張感を維持して、観る者を飽きさせない演出と演技に感動しました。

## 度肝を抜かれる幕開き！ 息もつけられないほどの面白さ！

(神戸演鑑、長崎市民劇場ほかの感想文)

★何と言っても幕開きで度肝を抜かれました。場内が一瞬真っ暗になると、大音響とともに赤い照明に浮かび上がった数人の異形の者たち。上半身裸で、後ろ頭に仮面を着けて動く。なんと不気味。それが森の魔女たちだと分かる。「すっげー、ペリヤコーウィッチ演出?」。魔女たちを演じるロシア人俳優の筋肉に、その不気味な動きに再び驚き、これから何が始まるのかワクワクした。



★マクベスとマクベス夫人の罪悪からの狂気がものすごい勢いで感じられ、心に突き刺さってきました。4枚の回転扉が動きをスピーディーに迫力あるものにしていました。音楽と光、そしてテンポのある役者たちが

働きのできる妻が狂うのは、自らの残忍さに耐えかねたのでしよう。人は自分が思うより繊細で脆弱で善良なのかもしれません。

★面白かった！ロシア人の役者さんたちの身体表現力の高さは素晴らしい。善は悪、悪は善」という名言、マクベスの弱さや狂気、能登さんが見事に演じていました。

★ペリヤコーウィッチの遺作となってしまうけど、彼の演出の迫力を満喫！すごいです。シエイクスピア劇の独特のせりふ回しが苦手な私でもよく分かりました。佐藤史郎さんの翻訳が良いのかな。15分の休憩を含めて2時間35分の上演時間もグッド。あまりの面白さに、息もつかず、集中して観ていました。

★勇敢な戦士が、降つて湧いたような野心に踊らされて臆病な暴君になっていくのが哀れでした。美しく

★思い切つて観る時間を作ったのは大正解！想像力を募らせ、舞台に引き込まれていく自分に気が付きました。こんなに面白くシエイクスピア作品を観られるとは。もう一度観たかった！